

付 編

津雲 A 式土器の細分に向けた若干の考古学的考察 － 愛媛県松山市久米窪田森元遺跡 S K 1 出土土器群の分析を通して －

愛媛大学法文学部 幸泉 満夫

はじめに

愛媛県松山市久米窪田森元遺跡の発掘調査では S K 1 覆土中より縄文時代後期、初期縁帯文段階の良好な一括資料が検出された（第 1 図）。該期一括事例は今日なお稀少であって、本例を除くならば今治市高橋湯ノ窪遺跡 S K - 10・11、江口貝塚 E トレンチ 9 層等の成果が有望視できる程度である。状況は隣県を展望しても概ね同等であって、香川県永井遺跡 F - 16 X 層、広島県比治山貝塚貝層下、徳島県貞光前田遺跡 I A 区 S B 2001 などでのその可能性が指摘できるに過ぎない。本節ではこの稀少な初期縁帯文一括資料に対する若干の型式学的考察を加え、その意義を述べることにしたい。

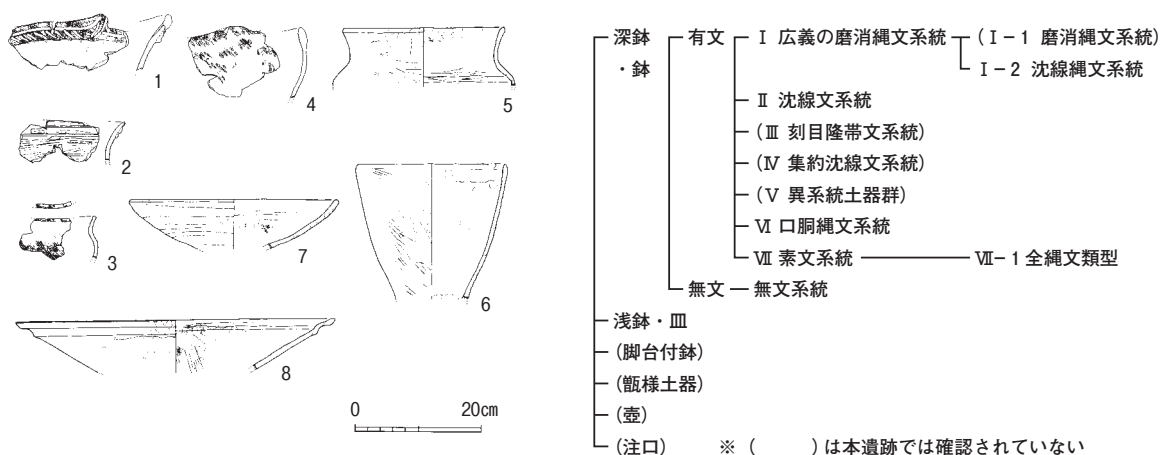
器種組成は深鉢、鉢、浅鉢から成る。壺形、注口土器等の稀少器種の存在は本遺跡では今のところ確認されていない。

各々は第 2 図に示すような文様系統で構成される。括弧書きで記した文様系統、類型は本遺跡では未だ確認できていないが、総個体数 35 点（口縁部片）という資料制約による可能性から存在を仮定している。

以下、深鉢・鉢、浅鉢の順に年代論に焦点をおいた考察を加えていく。ただし底部については節末にて別途私見を述べることにしたい。

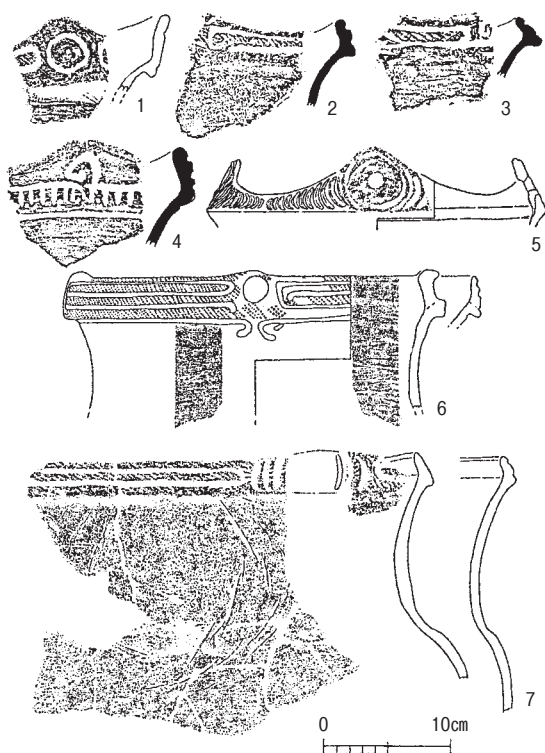
I 深鉢・鉢

深鉢・鉢は全器種中の 57.1% を占める（口縁部個体識別法：宇野 1992、以下同様）。文様系統は、沈



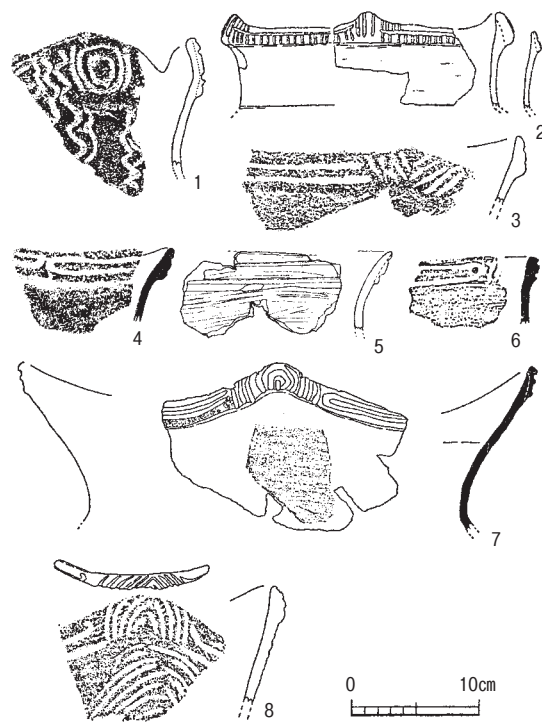
第 1 図 久米窪田森元遺跡 S K 1 出土土器の器種組成

第 2 図 初期縁帯文期の器種・文様系統組成



第3図 初期緑帯文深鉢 i 口縁の諸例

1 井門Ⅱ（愛媛）2～4 芋平（広島）5 田益田中（岡山）6 文京（愛媛）7 津島岡大（岡山）



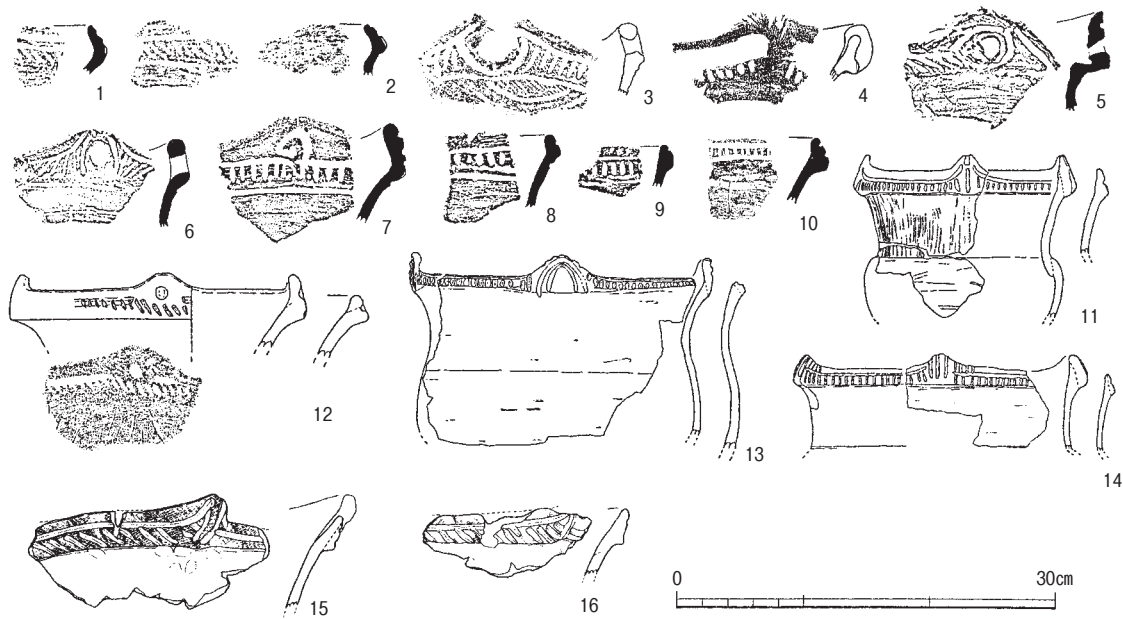
第4図 初期緑帯文深鉢 ii 口縁の諸例

1 矢田八反坪・大出口（愛媛）2 林原（島根）
3・8 井門Ⅱ（愛媛）4 江口（愛媛）5 久米窪
田森元（愛媛）6 洗谷（広島）7 西分増井（高知）

線縄文系（第Ⅰ－Ⅱ系）、沈線文系（第Ⅲ系）、口胴縄文系（第Ⅵ系）、素文系全縄文類型（第Ⅶ系－Ⅰ）、無文系（第Ⅷ系）で構成されている。うち無文系は55.0%と過半数以上に達した。

ここではまず、本遺構出土の有文深鉢・鉢を例に、その編年位置について捉えておこう。既存の津雲A式土器諸例とを比較するならば、次に示す四つの特徴が見出せる。すなわち（1）緑帯部作出手法が外面貼付型のみで構成される、（2）ブラシ状文の残存、（3）口胴縄文系と全縄文類型の共伴、（4）沈線文のみによる土器の存在の四点である。

三森定男（以下、敬称略）による津雲A式提唱以来、同型式にはいわゆる屈曲口縁と外面肥厚の二者が知られてきた〔三森1938、中村1976、千葉1990等〕。ところが、本例には前者の屈曲口縁、すなわち口縁下端意匠を二段に積み上げて成形する手法は認められない。外面肥厚型のみで構成されているのである。以下、前者を i 口縁、後者を ii 口縁と仮称しておこう（第3・4図）。改めて、周知の津雲A式相当の深鉢口縁部文様帯破面を詳しく観察するならば、両者の間には明らかな製作技法の差が見出せる。そしてそれらは遺跡や地点単位で異なる傾向を示す場合があることに気付くだろう。i 口縁と ii 口縁の差異は器種差や地方差を前提とするものではないはずである。そこで改めて緑帯文成立期新相の深鉢口縁を観察するならば、外面施文型へと転化を遂げたばかりの初期口縁はその大部分が二段積み上げ、すなわち i 口縁を採用していることがわかる。従って、型式学的見地より i 口縁を呈する津雲A式は口縁部文様帯外面が肥厚する、いわゆる緑帯化した ii 口縁に対して相対的に古相と位置付けることが可能である。近年、調査が実施された愛媛県上分西遺跡においてもその殆ど全てが ii 口縁で占められており、さらに本例とは異なって内面施文型が盛行するなど（上分Ⅱ～Ⅲ期）、ii 口縁の存



第5図 外面施文型ブラシ状文の諸例

1・2 道後城北RNB（愛媛）3 鶴来が元（愛媛）4 荒川（徳島）5・6 洗谷（広島）7～9 芋平（広島）10 津雲（岡山）
11～14 林原（島根）15・16 久米窪田森元（愛媛）

続と変容を示唆する好事例を提供している〔幸泉2011b〕。対して、本例の場合は縁帯文期以来のブラシ状文が僅かながらも外面施文型深鉢に継承されており、かつ内面施文型が全くみえないなど、i 口縁卓越期と上分西Ⅱ期との中間に位置付けるべき特徴を備えている。

つづいて第5図にはブラシ状文を有する外面施文型土器の事例を挙げた。すでに筆者らが松ノ木式からの型式学的連続性を指摘したところであり〔幸泉・幸泉文子2005〕、近年では島根県林原遺跡の良好な資料群をもとに稲田陽介が林原式を提起している〔久保田・稲田編2007〕。第5図からは稀少ながらも中・四国地方のほぼ全域における分布が想定できる。林原式の是非についてはひとまず置くとして、その大部分がi 口縁を採り、かつii 口縁が稀有であることから津雲A式古段階を中心に散見される一群として理解すべきであろう。

共伴する第Ⅵ系統、口胴縄文系土器については、口縁としては僅か2点の出土であるが（第1図3）、施文原体が単節RL縄文であることに加え、幅狭の外面肥厚帯、口唇上施文など、そのいずれもが西部瀬戸内における初期縁帯文期の特徴を満たすものである〔幸泉2009a〕。無論、第Ⅶ系統・全縄文類型（第1図4）の共伴とも編年上矛盾するものではない〔幸泉2009b〕。

沈線文土器の存在については愛媛県江口貝塚、高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡など、従来より四国西北部において周知されてきた地域要素であり、その起源は縄文中期末段階にまで遡る〔幸泉2001・2010a〕。今後はこうした地域差併存の真相についても議論を深めなければならない。

Ⅱ 浅鉢

本遺構では全器種中の42.9%とかなりの高比率を占めている。また全点無文である点、皿形や中華ナベ形土器がその主体を占めている点が特筆できる（第1図7・8）。本例よりも型式学的に一段階以上新相を主体とする愛媛県上分西遺跡の資料群では中華ナベ形が3割以上の高比率を占めたが、同時

にボウル形17.1%、緩く字形が11.6%という傾向がみられた。皿形は僅か1.7%に過ぎないのである〔幸泉2011b〕。これに対して本遺跡では中華ナベ形に加え皿形が26.7%を占めるという明確な違いが看取できる。こうした形式組成の相異は香川県永井遺跡等の層位事例からも確認できる場所であり、本資料群が上分西遺跡の主体時期よりも古相に位置付けられることを傍証する傾向といえるだろう。

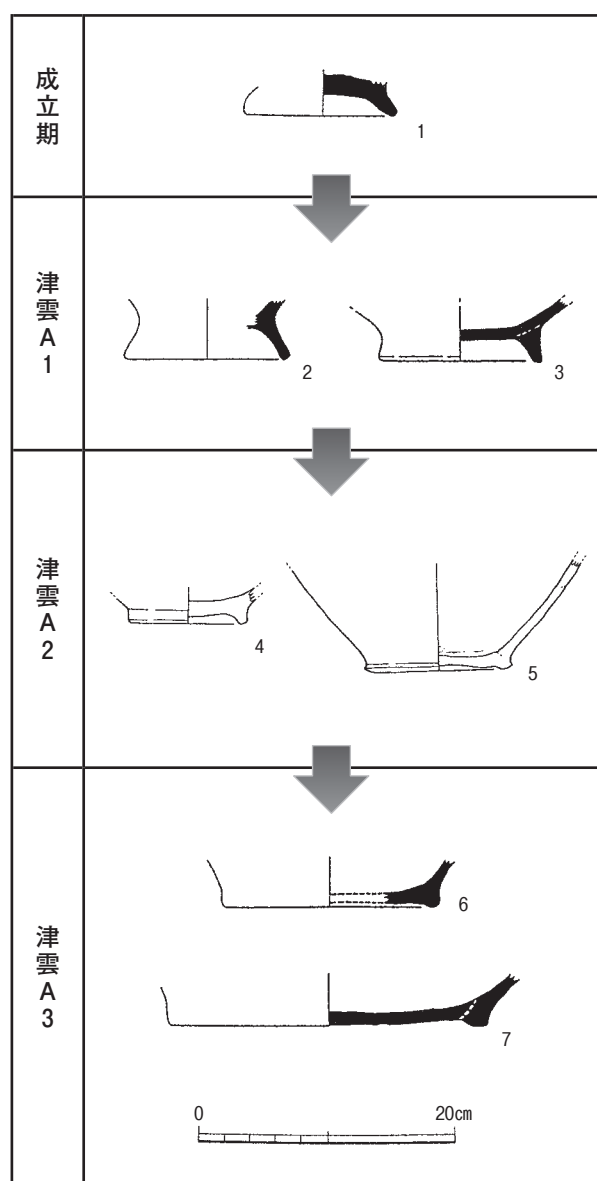
Ⅲ 底部

深鉢・鉢底部は小地域差を反映する非視覚的部位として重要視されることから、最後に本事例に関する所見を付記しておく。個体数の制限から組成比の算出は困難であるが、全点広義の高台底で占められており、興味深い（第6図4・5）。すでに幾篇かの拙稿で述べてきたように、当該地域では初期縁帯文期においてはハ状高台底が主体を占める。第6図2・3などがその典型である。対して、上分西Ⅲ期に併行する松山市文京遺跡11次5層では大型の低平高台底が80.0%と主体を占めた（第6図6・7）。すなわち底部外縁隆帯が次第に低平化しつつも、しかし備讃瀬戸地域とは異なって高台底が長期間存続し続けるのである〔幸泉2002・2011a〕。本事例は両者の中間形態を示すことから、松山平野における高台底隆帯の低平化過程を保証する好事例といえよう（第6図4・5）。すなわち

i 口縁が卓越する津雲A式古段階では典型的なハ状高台底が隆盛していたのに対し、ii 口縁に移行した本遺構資料では外縁隆帯の萎縮化が進み、その脚高は1～4mm程度にまで萎縮する。ただ該期ではまだ底径の大型化は認められない。ii 口縁退化期に顕在化する底部大型化現象は北部九州周辺における「底部変動型」技法への技術転換を示唆する可能性がもたれることから、今後は津雲A式新段階にみる土器製作技法の変化について、外部要因の可能性を含め、詳しく再考を行う余地が残されているといえよう。

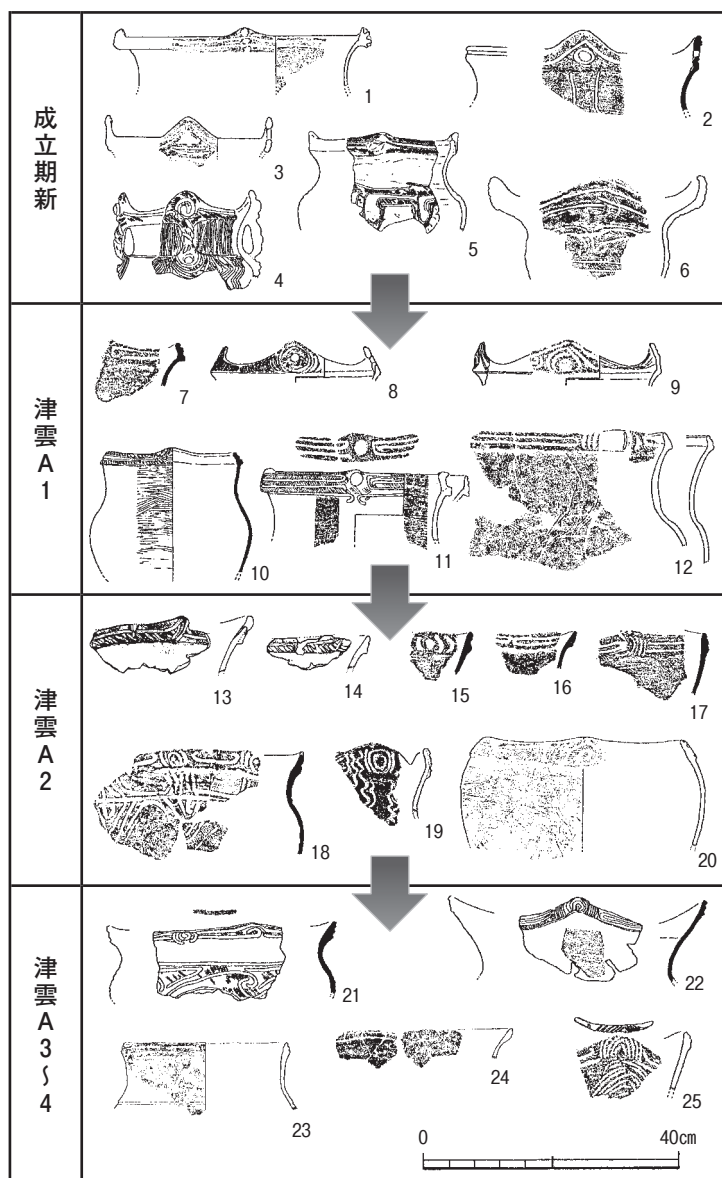
Ⅳ 結 語

以上、四国地方では稀有といえる津雲A式期の一括資料をもとに若干の所見を述べてきた。従来その認識が曖昧であった屈曲 i 口縁と外面肥厚 ii 口縁の二者を本一括資料の分析を契機に区分し得た意



第6図 松山平野周辺における深鉢底部の変遷

1・2 道後城北RNB（愛媛） 3 比治山（広島）
4～6 久米窪田森元（愛媛） 7・8 文京（愛媛）



第7図 津雲A式の細分に関する予察

1・3 なつめの木（香川） 2・4・5 松ノ木（高知） 6 石井国友（愛媛）
 7・15・17 芋坂（広島） 8・9 田益田中（岡山） 10 比治山（広島） 11 文京（愛媛）
 12 津島岡大（岡山） 13・14 久米窪田森元（愛媛） 16 江口（愛媛）
 18 平城（愛媛） 19 矢田八反坪・大出口（愛媛） 20 永井（香川）
 21・22 西分増井（高知） 23・24 上分西（愛媛） 25 井門Ⅱ（愛媛）

義は大きい。すなわち本節の検討から新たに津雲A式を四小期以上に細分しうる可能性を見出せたのである。ここでは仮に津雲A 1、A 2、A 3、A 4式と仮称する。A 1式はi口縁の卓越する段階、A 2式はii口縁が卓越する段階、A 3～4式はii口縁の萎縮退嬰化が進行した段階である。このうちA 3～4式はかつて宮本一夫が愛媛県文京遺跡第11次調査区5層資料をもとに提唱した津雲A式新段階〔宮本編1990〕、また近年筆者が提唱した上分西Ⅱ・Ⅲ期〔幸泉2011b〕とほぼ同義である。縁帯文成立期新段階と津雲A 1式との分別基準については、紙幅の都合別稿に譲らざるをえないが、標式資料たる岡山県津雲貝塚出土土器を津雲A式成立の定点に据えるならば、口縁部主文定型化の有無がその指標の一つとなることはいうまでもない。

1987年以来の待望であった久米窪田森元遺跡SK 1出土土器群の本報告が発刊されたことにより、今後は津雲A式編年の細分と実相解明に向けた議論が再び加速するものと期待される。また海を介した九州地方、あるいは四国西南部側とのクロスデイトイングを今後一層推し進めるうえにおいても、本例がその糸口となる重要資料の一つとなることを確信する。

（幸泉満夫）

参考文献

石井龍彦編2007『田ノ浦遺跡』山口県埋蔵文化財センター
 植田文雄編1996『正楽寺遺跡』能登川町教育委員会
 宇野隆夫1992「食器計量の意義と方法」『研究報告』第40集、国立歴史民俗博物館
 大北和美編2005『荒川遺跡』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター

小都 隆1976 a『洗谷貝塚』福山市教育委員会・洗谷貝塚発掘調査団
 小都 隆1976 b「芦品郡新市町芋平遺跡について」『芸備』第4集、芸備友の会
 鎌木義昌1986「津雲貝塚」『岡山県史』第18巻、岡山県史編纂委員会
 木村剛朗・辻内 功・草地性自1982『平城貝塚第Ⅳ次発掘調査報告書』御荘町教育委員会
 木村剛朗1987『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研
 木村剛朗1995『四国西南沿海部の先史文化』幡多埋文研
 久保田一郎・稲田陽介編2007『林原遺跡』島根県埋蔵文化財調査センター
 栗田茂敏1989「39.久米窪田森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報』Ⅱ、松山市教育委員会
 幸泉満夫1999「西瀬戸内における九州系縄文土器」『真朱』第3号、徳島県埋蔵文化財センター
 幸泉満夫2001「西日本縄文後期土器組成論－瀬戸内地方における沈線文系土器に関する研究－」『考古学研究』第48巻第3号、考古学研究会
 幸泉満夫2002「土器底部形態にみる縄文時代後期社会の小地域性」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論集
 幸泉満夫・幸泉文子2005「九州の成立期緑帯文土器」『研究報告』第31号、山口県立山口博物館
 幸泉満夫2009 a「中国・四国地方における口胴縄文系土器群の成立と展開」『会誌』第26号、島根考古学会
 幸泉満夫2009 b「西日本の後期全縄文土器－粗製土器からみた東日本縄文文化の影響－」『古文化談叢』第61集、九州古文化研究会
 幸泉満夫2009 c「北部九州にみる縄文時代後晩期社会の小地域性」『古文化談叢』第62集、九州古文化研究会
 幸泉満夫2010 a「西日本沈線文系土器集成Ⅳ」『研究報告』第36号、山口県立山口博物館
 幸泉満夫2010 b「四国」『西日本の縄文土器 後期』真陽社
 幸泉満夫2011 a「土器製作技法にみる環瀬戸内海の縄文土器文化」『大会予稿集』瀬戸内海考古学研究会
 幸泉満夫2011 b「愛媛県上分西遺跡出土緑帯文土器群の編年学的考察－瀬戸内地方における平城Ⅱ式土器併行期の様相－」『上分西遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
 高橋康文・松本美香編2004『星原市東遺跡・星原市南遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
 谷口哲一編2011『田ノ浦遺跡Ⅱ』山口県埋蔵文化財センター
 千葉 豊1989「緑帯文土器の成立と展開」『史林』第72巻6号、京都大学文学部内史学研究会
 千葉 豊1992「西日本縄文後期土器の二三の問題－瀬戸内地方を中心とした研究の現状と課題－」『古代吉備』第14集、古代吉備研究会
 出原恵三編2004『西分増井遺跡Ⅱ』高知県文化財団埋蔵文化財センター
 泊 強編2001『貞光前田遺跡』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
 中野良一編1994『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ－鶴来が元遺跡 一』愛媛県埋蔵文化財調査センター
 中村友博1976「出土遺物について」『縄手遺跡』2、東大阪市遺跡保護調査会
 西尾幸則1989「道後城北RNB遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報』Ⅱ、松山市埋文センター
 西川真美編2006『高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
 乗安和二三ほか編1991『桜島遺跡』山口県教育委員会
 橋本貴登2000「矢田八反坪・大出口遺跡」『一般国道196号今治北道路埋蔵文化財調査報告書』愛媛県埋蔵文化財調査センター
 橋本久和編1995『芥川遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
 藤川智之編2003『矢野遺跡Ⅱ』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
 藤永正明ほか編1981『林遺跡発掘調査概報』大阪府教育委員会
 松崎壽和1951「広島市比治山貝塚」『広島縣史跡名勝天然記念物調査報告』第6輯、広島県教育委員会
 三森定男1938「先史時代の西部日本（下）」『人類学・先史学講座』第二巻、雄山閣
 宮本一夫編1990『文京遺跡第8・9・11次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
 宮本一夫編1994『江口貝塚Ⅱ』愛媛大学法文学部考古学研究室
 森下英治編2008『本郷遺跡・川原遺跡』香川県教育委員会
 渡辺明夫編1990『永井遺跡』香川県埋蔵文化財調査センター

※ 本節幸泉による論考内容には、平成23年度国立大学法人愛媛大学法文学部人文系担当学部長裁量経費における研究成果の一部が含まれている。